

Eureka XI

六年制通信 No.8 令和5年6月2日(金)号

学校で学ぶこと

昔のテレビドラマは現代の目から見てコンプライアンスに引っかかるらしく、再放送ができないようです。つまらん。確かに「スクールウォーズ」なんか、毎回先生が生徒を殴りまくってましたからね、仕方ないか。「ふぞろいの林檎たち」(知らんでしょ、古いから)以来、いくつかのドラマを観てきました。面白いのもありましたね。

「101回目のプロポーズ」なんか毎回爆笑でしたし、「男女7人夏物語」や「リーガルハイ」も面白かった。最近あまりテレビ自体を観なくなりましたが「イチケイのカラス」というドラマは好きでずっと観ていました。竹野内豊さんや黒木華さんたち、本当に演技がうまいですね。裁判官が主人公で竹野内さんは事あるごとに裁判所主導で再調査をしたがります。黒木さんは時間がかかりすぎると反発しながらも、真実を追求し正しい判断を下そうとする竹野内さんの姿勢に共感していく、そんな物語です。

何話でしたか、こんな話がありました。少年が現金輸送車を襲い5千万円を強奪する。しばらく逃げたあと少年は衆人環視の中でそのお金を撒き散らす。人が持って行ったり川に流れたり、5千万円は全額が戻らなかった。この少年の犯罪を調べていくうちに、養護施設で育った三人のうち一人であることがわかる。A男B男C子は一歳ずつ離れている。三人は仲の良い兄弟妹のように育つ。C子にはピアノの才能がありコンクールなどで優勝もし、二人の兄たちは温かく見守る。C子の誕生日にA男は遊園地に連れて行き、怖がるC子を励ましジェットコースターに乗せる。その時園側の整備不良による事故が起きC子は左手を負傷し、ピアノが弾けなくなる。園の責任を追及するが法律は味方になってくれない。また、高額な最先端医療を受ければC子の左手は完治することをA男は知る。そこで遊園地の現金輸送車を襲い警備員をスタンガンで眠らせ、手術に必要な額だけをあらかじめ抜き取り、それを別のところで待っているB男に託す。残りの金をもって自分は逃げるふりをしてマンションの階段を上がり現金を撒き散らす。撒く前にお金が抜き取られているなどとは誰も思わない。A男は完全黙秘をすることによって、B男たちとのかかわりを隠し、自分一人が罪をかぶろうとする。裁判所の捜査がB男にも向かっていることを知るとA男は、やったのは俺だ、早く判決をと法廷で叫ぶ。この悲しい犯罪を、少年事件を初めて担当する黒木さんは、非常に強い温情をもって裁く。違法に奪ったお金で手術はできませんから、C子の手術は中止になるのですが、そのことに逆上するA男に裁判官の黒木さんは説諭します。どんな理由があろうとも、罪を犯してはならない、と。こんなお話です。妹を愛する兄弟が起こした事件です。皆さんなら、やはりA男に同情しますか？

私はこれを観ながら、もちろん娯楽のドラマですから家庭で観ている分にはこの結末でいいのですが、もし教育現場でこのドラマを教材に出されたら生徒たちに何を伝えるだろうと考えていました。A 男のやったことは極めて自己中心的で、後先を考えない、愚かで、自暴自棄で、独りよがり、責任の取りようのない罪深いものです。彼は輸送車の警備員を襲っています。この警備員はクビになったかもしれない。家族も苦しんだでしょう。ひょっとしたら責任を感じて自殺したかもしれない。A 男はそんなことは微塵も考えていない。自分を投げうって C 子を救う、その一念で行動し、そのことで誰が不幸になろうと構わない、自分の行動の負の結果について何も考えない、考えようもしない。こういうのを救いようのない幼児性というのです。自分の取った行動が他に与える影響は、予測のつかない飛び火をする可能性があります。そのことを理解して行動するのが大人というものです。何かトラブルがあった時、相手のせいにならず常に自分はどうすればよかったのかを考える癖を、学校にいるうちに身につけなければいけない。私はきっと君たちにこう話すだろうと思いました。

今週のおすすめ

・内村鑑三 『代表的日本人』 (岩波文庫)

前に書名だけは紹介しましたよね。二宮尊徳が取り上げられている本だと。他に、西郷隆盛、上杉鷹山、中江藤樹、日蓮上人の偉人を紹介しています。皆さん、知っていますかね。西郷さんと日蓮は教科書にも載っているのを知っていますよね。上杉鷹山は藩政改革を成し遂げた藩主、中江藤樹は近江聖人と呼ばれた学者です。

正宗白鳥という評論家がありました。もう今は誰も読まないかもしれませんが、うちの図書館に全集がありますよ。この人は明治の文学のことについては誰にも負けないと言った人で、あの気難しい小林秀雄が「先生」と呼んだ人でもあります。ウェーリーの英語訳で『源氏物語』を読んで感動したそうです。それくらい英語もできた人です。その正宗が大変尊敬していたのが内村鑑三で、自身も内村の影響でキリスト教に入信しています。内村は新渡戸稲造と札幌農学校 (今の北海道大学) の同級生で (実年齢は内村の方が1歳上)、あまりに成績優秀であったため申請もしていないのに奨学金が出されたとか。こんなに優秀な学生に学校として奨学金を出さなければ笑われるのではないかと教授会で問題になったらしい。これ、私は本当の話だと思っています。

この本は内村が選んだ日本の偉人を英文で紹介した本。岩波文庫は翻訳です。私は、今でもそうなのですが、長い間西郷隆盛に対する評価がよくわからないでいます。維新の立役者であるとか、人望が服を着て歩いているような人だとか、そういうのは様々な事例からわかるのですが、征韓論以降の西郷の行動が全く分からないのですね。あのあたりから西郷は全くビジョンを持たずに行動しているようにしか見えないのです。そういう西郷を内村鑑三がどう見ていたか、それが知りたくて読んだわけです。実際には学生時代に読んでいたのですが、残念ながら謎が解明されてはいません。ただ、内村鑑三の教養の高さと西郷に対する敬愛の念の強さを感じました。

BGMは いきものがかりの ありがとう でした…。